

歴史を書くということ

現代にあって歴史、それも「書」の通史を書くとはいかなる営みだろうか。書は通常、紙と筆と墨とを前提とする。だが東アジアで文字の起源を尋ねるならば、そこには甲骨に刻まれた文字や、青銅器あるいは石碑に彫られた金石文が視野に入る。墨蹟といえども、紙以前には、木簡、竹簡に残される。従来の書道史はこの当然の履歴を正視せず、その動態から目を背けてきた。不可欠な媒体の変貌とともに発生した歴史の力学を、ハナから無視してきた。読書とは、記された文字を解読する営みには止まらない。文字が書を通じて現象し、言語が書を通じて生成し、時代が書を染め、書が歴史を織りなしてきた。石川九楊は、その姿を直視し、そこに闘せめぎ合う作用や反作用の総体として書史を構想する。

『中國書史』は無数の発見と試行錯誤の持続体だ。そこには上梓に到る二十年の年月が積層しており、細部と細部が互いに呼応しつつ全体を築き上げる。先行する章の萌芽が次章で思わぬ成長を遂げ、それが著作全体に万華鏡のような共鳴を響かせる。反復とも見まごう記述は、しかし着実に螺旋状の周回を遂げ、読者をより高次で新奇な眺望へと誘ってゆく。あくまで個々の書に密着した観察から出発しつつ、著者は新たな術語や概念を陸続と発案し、吟味し、提唱し、刷新する。その数は優に百を超す。

解説 歴史哲学としての『中國書史』——その「詩想」の「うつわ」と「うつし」

稲賀繁美

九楊の著作にいままで親しんでこなかった新たな読者にも配慮して、まずこの段階で最低限、基本的語彙の確認をしておきたい。なにより「筆触」と「筆蝕」との差異を確立したのが本書の達成だった。それを筆者は《六朝時代の「草書」》「王羲之」「二折法」筆触「自然書法から初唐時代の「楷書」》「三折法」筆蝕「基準書法への転移」と要約する（『書と文字は面白い』文庫版あとがき、一九九六年、本著作集第一巻「解題」参照。俗称「真行草」とされる学校教育的な位階秩序は、書の発生的な見地に立って、最初から否定され、解体される。だがその鳥瞰図は漸く二〇二、三一二頁（初版九九、一五三頁）に図示される。なぜならそれは予定調和の決定論ではなく、楷書の確立期を俟って初めて遡及的に復元できる経路であり、著者の探索なくしては姿を現わさない歴史風景だったからだ。言い換えれば、この発見を冒頭に前提として提示し、あらたな権威の書として中国の書の歴史を鳥瞰してみせる、といった教則本の論法、暗記物の誘惑は、本書では画然と拒絶されている。本論四五章を順に読むことは、読者にとって、著者の発見と認識の展開を追体験する探索の道程となる。真理は到達点にあるのではなく、その途上に顕現する。

それまでの著作で「筆触」と記されていた語彙は、この過程で「筆蝕」へと分岐する。その背景には何があったか。「蝕」はあくまで紙面に毛筆が「蝕れ」、墨がその軌跡を残す作用を意味する。だが紙と筆と墨の以前には、亀甲に刻印を刻み、金属器や石碑に陰影を彫るという「蝕」の位相があった。とはいえ祭器や石碑に人間の営みを「蝕」する行為の裏には、その前提として、今日もはや伝わらない「書」が潜んでいたはずだ。そして初唐期の政治制度の成熟とともに、紙と石との位相が逆転する。「石・鑿・影」が「紙・筆・墨」に置換される。だがここにはいまひとつの弁証法が潜む。「紙の深層には石が埋まっている」。筆者はそれを「比喩」だと語るが、九楊の言う「比喩」には要注意。現代和製漢語の「比喩」は西洋語の Metaphor の翻訳語だが、それは原義としては「運搬」transport、「翻訳」translate、「まり」「うし」/「憑依」をも意味した。そして「紙・筆・墨」の「書」は、起源をなす「石・鑿・影」の

亡霊でもあるからだ。

王羲之という亡霊

歴史とは現在存続している証拠を起点として時代を遡る。それは定義からして時代錯誤な営みであることを免れない。そしてその限りにおいて、起源は喪失としてしか姿を見せない。書の歴史においてこの位置を占めるのが、東晋の王羲之に他ならない。周知のごとく「蘭亭叙」（西暦三五三年と推定）には、真筆は現存しない。それを愛惜した唐の太宗が自らとともに墓所に埋葬させたためである。現在伝わる書写のうち、北京の故宮博物院に乾隆帝遺品として遺り、中国の権威筋が最良とみる「八柱第三本」を、筆者は「奇想天外のヒゲ蘭亭」と罵倒する。この著者の判断の妥当性には疑いあるまい。これら伝本はいずれも輪郭をナゾってそこに墨を埋め込んだ「双鉤充墨本」にすぎない。そのうち画家としても著名な米芾の臨本との伝承もある「八柱第二本」は宋代の「三折法」を安定した水準で駆使した逸品だが、もはやそこに六朝の書体の幻影は透視しがたい。これに対して「八柱第一本（張金界奴本）」は、転写の時点の唐代の書法と、六朝書法とが重畳した「双頭の怪物」「合成体」だと著者は形容する。「合成体」には「サイボーグ」とルビが振ってあるが、cyborg は cybernetics から派生し、cyberspace いわゆる「仮想空間」とも同根。その語源はギリシア語の「舵取り」に遡る。とすれば中国書史は不在の水夫の舵に誘導され、残された遺品群から架空の原典を遡及推測することで、そこに模範的典籍をいわば捏造した歴史だった、とも「比喩」できようか。

こうして筆者は独自の方法を駆使し、重層した歴史の癒着を見事に剝離してみせる。そしてここには、おそらくは著者自身の意図をも超えて、本書の方法論の精髓が露呈している。「蘭亭叙」写本群は、粗悪な模本や拓本も含め、喪われた原書の気韻を「写」し、その生動を現代に「遷」そうとする。それらの遺品は、それぞれが不在の原典との距離を、異なった角度から「映し」つつ物語る。反復は差異を招き「蘭亭叙」は、いわばそれら幾多の痕跡の合成像

として、模本群の彼方に幻視される面影だ。だがその空虚な面影、原初の欠落にこそ、歴史認識の真理がある。自ら
の手で喪失させた過去の真筆にそって、現在の運筆を「法」として基礎付け、後代の歴史の磁場までも設定した唐の
太宗の政治力。言い換えれば、典拠としての「蘭亭叙」は、自らの喪失を代価として超歴史的な模範たる地位を確立
し、それによって後世を自らの呪縛からも解放したのではなかったか。

内在の自発と事後の余韻と

ここから本書は縦横かつ自在な展開を見せる。規範が確立した後の中国書史が、孫過庭の「反動」の傍らで張旭の
「狂書」を生み、顔真卿の「類型」の傍らに懷素の「蛇行」を招いた、狂躁、過剰の経脈も見えてくる。さらに宋代
における規範からの逸脱と不均衡（蘇軾）、黃庭堅の「齒切れ」と「粘着」、明代における「ひねりとねじれ」（祝允
明）、「夢追い」（文徵明）あるいは戦乱場の「無頼」（徐渭）、王鐸の「媚態」。さらには清征服王朝下の八大山人すなわ
ち朱耷の「ぶつきらぼう」と「刀の筆蝕そのものを丸ごと毛筆に呑み込んだ」金農。そして鄭燮の奇怪な「低く身構
える」書体。やや遡って、董其昌の剛胆の裏に隠された踟躕や屈託と、張瑞の「剃刀」。そして清末考証学における
篆書や隸書を無理矢理紙本のうえに奪回する擬似復古主義の時代倒錯（鄭石如）、その「退却」の結末としての「碑学
の終焉」（趙之謙）と、篆刻への回帰による、書からの「越境」（呉昌碩）と表現への脱却（齊白石）……。その道筋と
それを密かに統べる内在の理路も、執拗細密な分析と果敢な視点のもとで、截然と剔抉されることとなる。

「うつろい」と「うつろ」と

ヘーゲルは芸術家の営みとは自己の航跡を背後に残す空虚な運動と見た。書の墨蹟をこの見解にそって、西側世界
の écriture (A.-M. Christin) と交差させる課題が将来に残る。また規範と擬態との「逆数」的相互作用のうちに歴史

の実相を捉える構想は、本書末尾に萌芽を見せるが、それは著者の「二重言語」日本語・日本文化批判へと継承され
てゆく。原著の刊行に「粉骨砕身」尽力した故・八木俊樹は、書に現われた詩想への言及を回避する石川九楊の自己
限定ぶりに、いささか注文をつけた（『中國書史』「跋」および本巻「解題」参照²⁾）。だが倭・中・西の「三重櫓門」あるいは韓
中日の三巴の無限軌道の虚焦点、「主語」と「述語」との「あいだ」に、過去を未来へと「うつし」つつ「うつろう」
「うつわ」たる『書』の実相が、今や実体なき亡霊の姿に仮託し、「言語」として浮上しつつあるはずだ。

（二〇一六年五月四日）

(1) アンヌ・マリ・クリスタン編『世界の文字の歴史文化図鑑』澤田治美監修、終風舎、二〇一二年。原題は Anne-
Marie Christin ed. *Histoire de l'écriture*. Flammarion, 2001.

(2) 八木俊樹全文集刊行委員会『逆説の対位法』八木俊樹全文集』二〇〇三年。